





百首秘斗豫峨他梨卷之四

百首秘斗豫峨他梨卷之四

目錄

紀貫之 歌譯

初瀬寺梅の話

土佐日記の話

蟻通明神の話

清原深養父 歌譯

文屋朝康 歌譯

寛平歌合の話

右近 歌譯

支野少将の話

参議 歌譯



貫之 歌譯

津國河尻の地理古今の話

寫真梅の話

平兼盛 歌集

申文書了了歌の詠

天徳歌合の詠

壬生忠見 歌集

竹馬に乗る春内十圍の詠

天徳歌合は負つ詠

清原元輔 歌集

万葉集訓讀の詠

七夕納合の詠

中納言敦忠 歌集

敦忠管絃は長せり詠

敦忠容良美麿の詠

中納言朝忠 歌集

人の妻は難ふれ歌の詠

朝忠肥満大食の詠

謙徳公 歌集

梨土重立歌仙の詠

檀紙と壁は押し詠

花山院の女三の言紙丈の宮中詠

西日根好志 歌集

船岡子日の遊の詠

蓬の詠

惠慶法師 歌集

源重之 歌集

百首の歌と一人して詠

大中臣能宣朝臣 歌集

頼基能宣所枕詠

小野の歌と壺の詠

藤原義孝 歌集

義孝少の通い詠

義孝兄才彦麿の詠

藤原實方朝臣 歌集

實方櫻狩の歌の詠

實方行城の詠と赤ん坊の詠

実方奥州へ下らるる伝
阿古屋の松の話
実方白川の家の話

藤原道信朝臣 兼華
道信孝へ深き話

実積沼のゆめの伝
実方の朝ん在る現す事

栗田右大臣の養子 兼華 伝

紀貫之

人をもくもく
あはれなる花
香ひひけり

中納言長谷雄の孫
とて又のちのちも故
名高きしへん也喜
幸中御書所の頼と
かへ越前持少掾内
膳曲膳少内記等の
官と展て大内記に
せし五位下と授けら
る也加賀美濃介
延長(中)大監(右)
京亮(左)御せし主佐
守(右)かへ天曆幸
中(左)番頭(右)かり候
五位上(下)すも木正
以(り)かへ同九年
卒す

古今集春上初瀬
久しやうとほほくはな
ふかんやうらうら
け梅の花を折くよ
是は貫之都

長谷の観音よまじらふ女よりてはる坊より一宿す
礼儀なりて業因はれしれと侍る坊の侍りて
此方より一宿すやれりてはる坊の侍りてはる坊
しりてはる坊の侍りてはる坊の侍りてはる坊
りてはる坊の侍りてはる坊の侍りてはる坊
香の中絶せしむる侍りてはる坊の侍りてはる坊
てはる坊の侍りてはる坊の侍りてはる坊
はる坊の侍りてはる坊の侍りてはる坊
花の侍りてはる坊の侍りてはる坊
はる坊の侍りてはる坊の侍りてはる坊

山梅と植し我んと花のうらやまそわたりてはる坊

紀貫之れ話

貫之延喜年中執事依く従事の友則其外凡河内躬恒生忠孝
才古今和歌集二十巻を撰せり其序は他と異なり都て其
の作文は皆漢文の體に似たり其の文は
好ましくしるべし其の文は
の古今集の序と大堰の序と土佐日記の序と
りて大堰の序の序は延喜帝の昌泰元年九月に米産上皇大堰
の序は
拾葉集の序は
りて土佐日記の序は
りて土佐日記の序は

橋通の明神と頼泉はいづれも
 じいじの着れはむしりや
 人の心はさうあまのあした
 うーかひ捨ての詔あつて
 ち。司人たる父母を棄て
 ると罪は深き下には
 かくせし子に異國
 よん。此國の美とた
 さん。その。このお
 け。まの。の。た
 こや。ふ人。く
 司人。を。に
 先。父。上。向。あ
 二。品。も。い
 ぬ。後。七。曲
 け。お。の。き。付
 と。小。官。か。ら。ふ
 糸。を。貫。く。あ
 け。り。も。お。け。り



橋通の明神と頼泉はいづれも
 じいじの着れはむしりや
 人の心はさうあまのあした
 うーかひ捨ての詔あつて
 ち。司人たる父母を棄て
 ると罪は深き下には
 かくせし子に異國
 よん。此國の美とた
 さん。その。このお
 け。まの。の。た
 こや。ふ人。く
 司人。を。に
 先。父。上。向。あ
 二。品。も。い
 ぬ。後。七。曲
 け。お。の。き。付
 と。小。官。か。ら。ふ
 糸。を。貫。く。あ
 け。り。も。お。け。り





鳥居橋ハ
八ノ
ヤ
八ノ
弁三
距
又
ある

母之此

始之在

た

一

日

母

は

た

小

母

は

らんりき

清原深養父の語

山城小野の里... 宇治郡の小野の里... 愛宕郡の小野の里... 菅原所... 愛宕の小野... 横川の麓... 昔惟喬の所... 此小野の里... 深養父の建... 源平盛衰... 又井挂... 又の... 静京の村... の山乃...

文屋朝康

あゝ風... 秋の... 秋の野のけ...

後撰集... 秋の野のけ... 秋の野のけ... 秋の野のけ...

又祖... 一説... 大舎人の... 皇の仁和... 文屋朝康... 大膳... 舎人...

文屋朝康の話

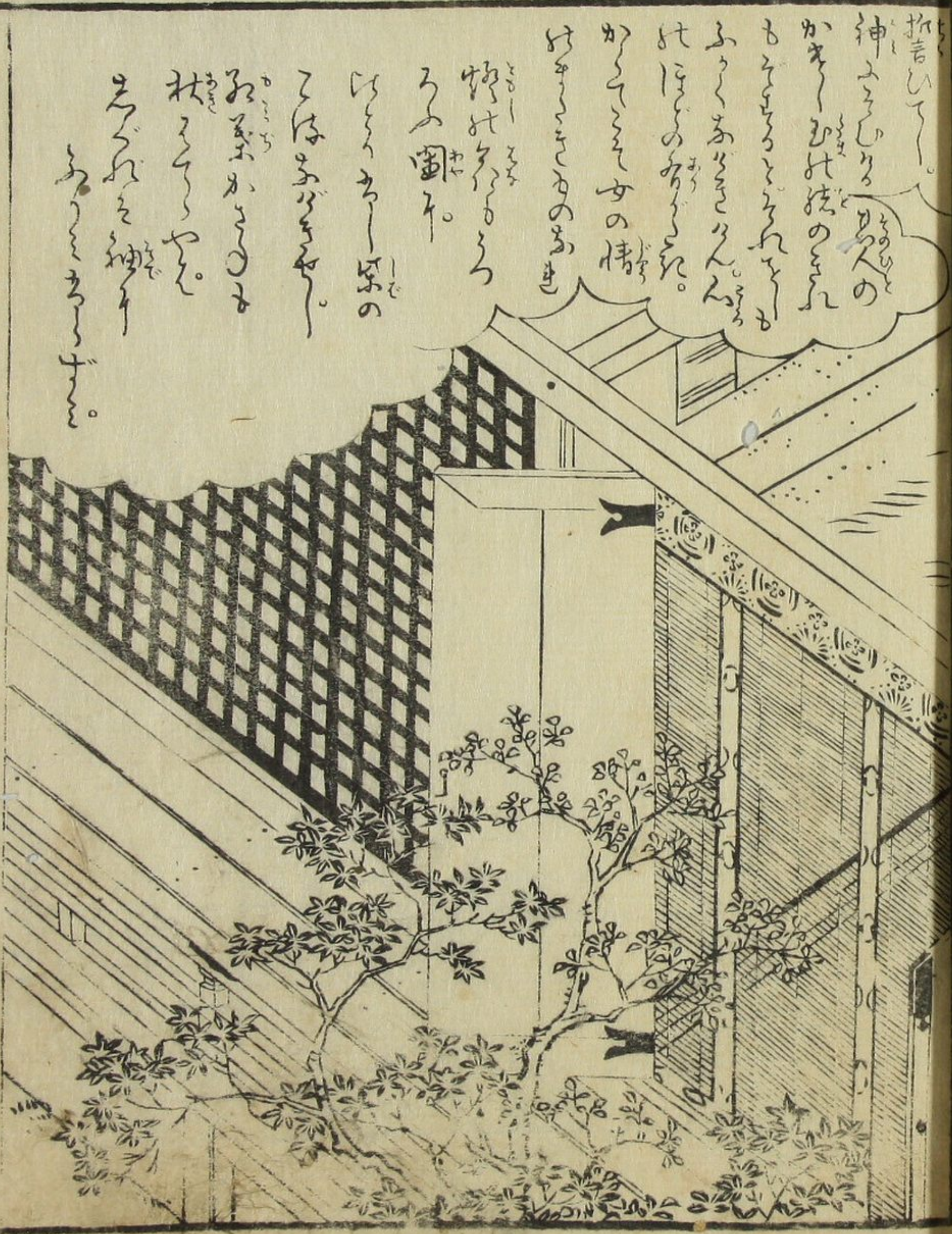
新撰萬葉集より書ハ菅家萬葉ともひく寛平五年の後の
 宮の歌合のことは是貞親王の家ハ歌合の終とあつて探して
 のかゝり付書よりある同の歌は終と載りてある
 は探集と延喜の抄付終の終とありて終とありて終とありて
 かせん不審なりしは終ハ寛平の頃は是貞親王の終合の時約
 康のまはるとは延喜の抄時をみんくまはるとありて終とありて
 によめり終ハ貞觀の頃より延喜の頃まで終とありて終とありて
 いう

右近

ちひさしきな終とありて終とありて終とありて
 ちひさしきな終とありて終とありて終とありて
 ちひさしきな終とありて終とありて終とありて

右近少将李繩
 一人ハ文野の
 終とありて終とありて
 のむすめ終とありて
 終とありて終とありて

拾遺集恋四題ありて終とありて終とありて
 終とありて終とありて終とありて終とありて
 終とありて終とありて終とありて終とありて
 終とありて終とありて終とありて終とありて



折言いし
 神ふしじり
 かきむははの
 もそそそそそ
 ふうふうふう
 けはのあはれ
 か〜〜〜の情
 物々々々々
 ろの園々
 こはあはれ
 杖々々々々
 ちんちんちん
 ちんちんちん



女の男
 おきき
 ら〜〜〜
 ちんちんちん
 ああは
 いづ〜
 ちんちんちん
 捨〜〜〜
 ちんちんちん
 ちんちんちん
 ちんちんちん

五序歌のすしつ...
 何れは彼人の...
 かくして...
 ...
 ...
 ...
 ...

参議寺の話

扶桑略記は天慶元年四月二十七日...
 任下...
 ...
 ...
 ...

光孝天皇の白王子
 是忠親土の曾孫太
 宰少式篤行の子
 天曆四年三月越前
 持り天历五年五月
 城介に任せ此應和
 三年四月大監物康
 保三年三月從五位
 天元二年八月駿河
 天曆元年十二月
 平の姓ハ桓武天皇
 皇子一品菅原親
 王の所子位四位下
 高棟の上は天長二
 年平朝臣と御
 ...

平ノ眞盛

志のあまらるる
 ...
 ...
 ...

拾遺集卷一...
 ...
 ...
 ...

是の如く評新ふる上朝野
 殿殿下はまに下は險
 昔の如くも中々唐あ
 評の如くも中々唐あ
 評の如くも中々唐あ

一、唐尚の君田を
 周へ送て西伯の所へ
 人々周に界ふ入る
 民俗を皆長し漢の
 二、周の徳を奉る
 三、周の徳を奉る



傳子意の如
 上書し宮小
 入て婢とあり
 父の刑と賤
 人、評ふ者
 文者順ふ
 一、周の徳を奉る
 二、周の徳を奉る
 三、周の徳を奉る



平兼盛の物語

平兼盛の話

兼盛は漢教をとりて漢學をもりて文才ありけり
少くして大學寮及第とて學問の事よくし
けり天曆の頃より次第は昇進して天元二年
に大膳の頭となりて或女其夫伊豆の
國を去りて其國を越えけり
是れ其妻とすけり
兼盛は訴へて申
文を書つけし歌

兼盛は其妻を去りて陸奥の館に
ありて其妻の申文の歌を
兼盛は訴へて申
文を書つけし歌

兼盛は其妻を去りて陸奥の館に
ありて其妻の申文の歌を
兼盛は訴へて申
文を書つけし歌

壬生忠孝の子
 天曆八年五月
 子所の定額膳部
 己未二月
 津村大目
 任

壬生忠見

おひすまの
 なる
 おひすま

拾遺集卷一の巻の天曆所時
 歌の意は世間の早は
 め

忠見幼名を多し其は忠実の改め又忠見と更なり物

壬生忠見話

拾津國の位せし家貧し早く幼
 けし時禁裏より召せられたる物なり
 竹馬の忠見童子も幼き時
 忠見の童子も幼き時
 馬の毛の
 の

元輔の官位は元暦五年
 年正月河内持保任
 正應和元年三月
 監物二年正月申監物
 康保三年正月大藏少
 正四年正月民部少
 正十二年大連ノ将
 安和二年九月信位
 下ノ叙せし十月河
 波校ち天延二年周
 防ち同平八月鑄銭
 の長官と云え元
 三月薬師寺の四男
 一りて五位上ノ叙せ
 らん寛和二年二月肥
 後ち任せし

清原元輔

かきつるがくれは
 けの末のわらわ

は
 は探ふ遠都るるけ
 歌のころきつる
 のきぬせしつる
 めししつる

はのころきつるのころきつる
 今の集陸奥歌の

君はつるがくれは
 しあふはつるがくれは
 山のしあふはつるがくれは
 なりしつるがくれは
 のきつるがくれは
 のきつるがくれは
 のきつるがくれは
 のきつるがくれは
 のきつるがくれは

清原元輔の誥

此元輔ハ内藏元深養父の孫清原朝言の次子として下野守顯忠のよし
母は五位上筑前守日向利生の子にして清原氏代に於てその才え
を以て元輔と稱せられたる其名を以てて大曆年中大中臣仲直
共は和歌所の寄人となり萬葉集を訓讀せられたる其頃より万葉
集をよみて人の稀なりは至りて想換なるなり其時和歌勅
撰のよきと梨壺は竹は撰集を撰せられたる撰者五人の中
仲直は清原朝言の子にして清原朝言の孫にして清原朝言の孫
に又撰集の詠はむに九多殿とて清原朝言の孫にして清原朝言の
孫にして清原朝言の孫にして清原朝言の孫にして清原朝言の孫

と云ふ書に清原朝言の孫にして清原朝言の孫にして清原朝言の孫
珠は歌に清原朝言の孫にして清原朝言の孫にして清原朝言の孫
と云ふ書に清原朝言の孫にして清原朝言の孫にして清原朝言の孫

二の扇は清原朝言の孫にして清原朝言の孫にして清原朝言の孫
祚二年六月二十一日平賀平賀平賀平賀平賀平賀平賀平賀平賀
平賀平賀平賀平賀平賀平賀平賀平賀平賀平賀平賀平賀平賀

天德四年三月
晦日於清凉殿

有歌合

講師

左

近光朝臣

右
特推朝臣

判者

方大臣兼判

天德歌合

古忠見左近衛

憲叔判詞云

小臣奏言。左右乳
俱以優也。不能定。

申。暗亦勅。各

言。可。歎。養。但。控

可。定。申。者。小。臣

請。大。納。言。臣。朝

臣。歌。屋。不。奏。此

同。右。三。議。揚。各。似

請。我。方。之。時。下。臣

願。假。天。氣。未。給。勅。判

令。密。錄。右。方。歌。合。判

臣。密。結。云。天。氣。未。在

左。放。者。因。之。遂。以。左

為。勝。

けり。合。の。時。情
惟。之。後。大。の
議。申。す。り。し。る
爲。の。初。と。も
な。ま。を。説。く
柳。の。歌。と
左。の。の
論。あ。ら。う。の
講。師。の
よ。ふ。あ。ら。う。の
時。情。非。色。哉
あ。ら。う。の。時。情
あ。ら。う。の。時。情



延喜十七年二月十二
日 昇殿日廿一
辛酉月位五位下位
一 藤原元成
加へられ廿二日
位長長六日
五位上同辛酉月友
之 藤原元成
小井原元成
辛酉月位四位上同
八月奉修位位
四月十二月五日
と云ふ
十二月七日二十八日
中納言教忠の傳

中納言教忠

延喜十七年二月十二日

中納言教忠の傳

拾遺集卷一
中納言教忠の傳
延喜十七年二月十二日
中納言教忠の傳

中納言教忠の傳

延喜十七年二月十二日
中納言教忠の傳
延喜十七年二月十二日
中納言教忠の傳
延喜十七年二月十二日
中納言教忠の傳

其日の陽は止りしよ〜
 菅笠の如きはなむ〜
 柏く博雅の位はかや〜
 又教るつ河世の中納言も
 橘杷の中納言も
 橘杷の山莊西坂中納言
 一條はそ曰く小野美の太ぬ
 大ぬは実村友大に
 おりり時二月中旬の
 上達部二三人
 南庭の
 市あはら〜
 ほい〜
 はのり中納言と大能
 つ中納言の

上達部の前納言
 真あ〜
 中納言
 當時和歌の道
 面あ〜
 大能

長き名の船なるは...
 古物...
 美麗...
 教...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...

中納言親忠

朝思三條右衛門
 方公の二男...
 納言山...
 三位右衛門督土御
 門中納言...
 物倍...
 應和二年中納言康
 保三年十二月五十七
 歳

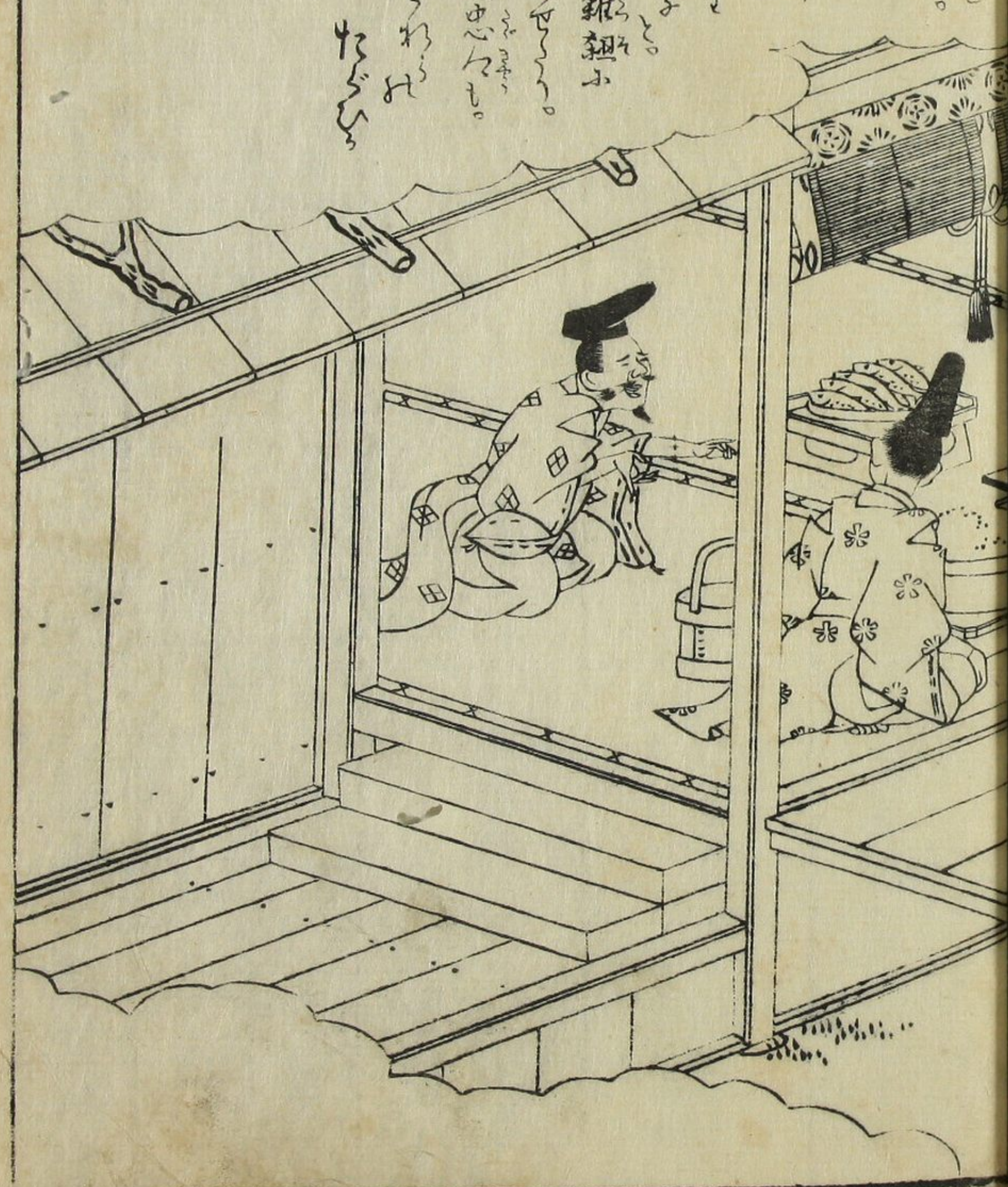
...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...

拾遺...
 ...
 ...
 ...
 ...

張 齋 賢 之 候
更 主 人 氏 大
か 桶 系
した
う へ
け ぬ の
海 飯 の
桶 入
一 試 入 飯 試
投 入 試
桶 試
飯 試
桶 試
入 試



食 料
や 食
や 食
五 難 紐
朝 忠
これ 也
た ぬ



肥前守相撲人けりてんそとあふりてんそと
 ちんそとちんそとちんそとちんそとちんそと
 ちんそとちんそとちんそとちんそとちんそと

謙徳公

あふりてんそとちんそとちんそと
 ちんそとちんそとちんそとちんそとちんそと
 ちんそとちんそとちんそとちんそとちんそと

拾遺集恋五のりひけ女のなまつりてんそと
 ちんそとちんそとちんそとちんそとちんそと
 ちんそとちんそとちんそとちんそとちんそと

一条物は伊尹公の
 て貞信公の孫九条
 右近相師輔公の一
 男之母八武彦也若
 系侍邦の女天禄元
 年右大臣に拜せし
 れ続く太政大臣に
 あせりてんそと
 十一三年十一月四
 十九日にて薨せ
 りてんそと
 賜りてんそと
 公の封せられ位に
 公の溢せりてん

これにまゝ
大層に大層に
ございまして
ていふまゝに
内事にて
おなごさま
十されさま
よんで他へ
御事あり
さうござい
まゝにまゝ
おぼろの御
あはれさま
故実かき
口次言曰
正月四日
左大臣嘗
五日右大臣
嘗是吉日



也。而追代
注大臣の事
正月行はれ
行大饗大臣不向
聖所云々

今活拾遺云々
西宮殿に大層に小所
此宮殿をさききり
あまたなかりれど
懐いふて、殿のねえ
さききりれど、ねえ
あまたなかりれど、ねえ
えかへん、あまたなかり
らうさる、あまたなかり
くいけきたらうさる



けふは汝切よ... 鳴呼... 謙徳公の誥

謙徳公の誥

伊尹公ハ才智アリ... 容身... 和歌... 村上帝の天慶五年十月和歌所の別當... 城統時文源順大中長... 伊尹公ハ其子ナリ...

まや... 伊尹公ハ其子ナリ... 伊尹公ハ其子ナリ... 伊尹公ハ其子ナリ... 伊尹公ハ其子ナリ... 伊尹公ハ其子ナリ...

三つ根え
 孝親の子は也
 寛和元年二月十日
 洛の...
 堂野...
 上...
 大...
 殿上人...
 懐...
 と...
 と...
 中...
 人...
 献...
 此...
 平...
 原...



此好忠な...
 三つ根え
 孝親の子は也
 寛和元年二月十日
 洛の...
 堂野...
 上...
 大...
 殿上人...
 懐...
 と...
 と...
 中...
 人...
 献...
 此...
 平...
 原...



先祖... 十津山院の寛和の
比の...

惠妻日記

拾遺集秘部... 林...

拾遺集秘部... 万里の東八町... 大井の在せ...

その... 其... 天...

惠妻法師の語

あきや... 兼盛の家集の... 假字... 此... 化者部... 海... 国...

おのりそは拾遺集の秋よはよは
書

又結古今集秋よは京の院
美志みえをうめく

秋よは入るるは
秋よはやうあま

源

か

お

け

詞花集悉上は冷泉院
時百首の秋
意ハ風

康保四年十月左
傷持の監
和元年十一月
下二年正月
介天延二年
馬助貞元
相模持
陸奥

和名抄云
淡路の古名

三代晉法云

陽成天皇の元慶八年九月朔
遠江國淡路橋長五十六丈
廣廿一丈三尺高一丈六尺云々

正保十六夜日記

けしふおけけより見し色ハ
かきとりの鳥いともけいし
ちかいて水のそとよりせの
くもみん

かきとりの鳥

まほしの

あはれ

けし

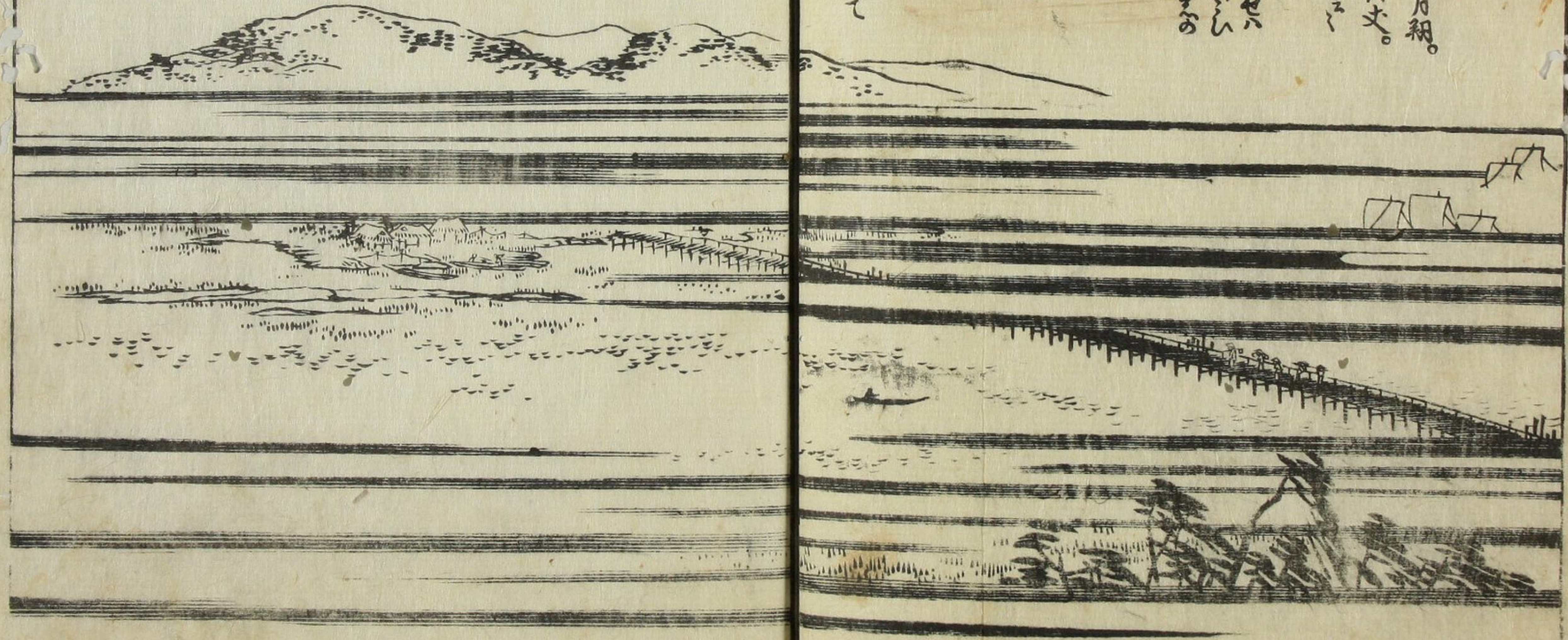
かき

神見

はつ日記

淡名けけりけりけり
夏本紙のりたき
このたひのりりりり
くらみきふあし
くらみきふあし

淡名けけりけりけり
ありづゝ淡名けけり
よおのりりりりりり
せり橋をりりりりりり
び海をりりりりりり
田名海をりりりりりり
東海道をりりりりりり
西の橋をりりりりりり



清和天皇の皇子貞元親の孫は後五位上信のよき
信のよき海の子は長保二年陸奥に去る長保四年
人の子は長保三年に長保四年に長保五年に
あはれに長保六年に長保七年に長保八年に

源重之の話

清和天皇の皇子貞元親の孫は後五位上信のよき
信のよき海の子は長保二年陸奥に去る長保四年
人の子は長保三年に長保四年に長保五年に
あはれに長保六年に長保七年に長保八年に
あはれに長保九年に長保十年に長保十一年に
あはれに長保十二年に長保十三年に長保十四年に

あはれに長保十五年に長保十六年に長保十七年に
あはれに長保十八年に長保十九年に長保二十年に
あはれに長保二十一年に長保二十二年に長保二十三年に
あはれに長保二十四年に長保二十五年に長保二十六年に
あはれに長保二十七年に長保二十八年に長保二十九年に
あはれに長保三十年に長保三十一年に長保三十二年に
あはれに長保三十三年に長保三十四年に長保三十五年に
あはれに長保三十六年に長保三十七年に長保三十八年に
あはれに長保三十九年に長保四十年に長保四十一年に
あはれに長保四十二年に長保四十三年に長保四十四年に
あはれに長保四十五年に長保四十六年に長保四十七年に
あはれに長保四十八年に長保四十九年に長保五十年に

神祇大副登主基

のふし... 所候...

大佐... 安和の...

少副... 候五位

下... 候五位

大佐... 安和の...

大佐... 安和の...

大佐... 安和の...

大佐... 安和の...

大佐... 安和の...

大佐... 安和の...

大佐... 安和の... 大佐... 安和の...

大中臣能宣朝臣の話

大中臣の姓... 能宣朝臣の話... 大佐... 安和の...

大中臣能宣朝臣

大佐... 安和の... 大佐... 安和の...

大佐... 安和の... 大佐... 安和の...

孫小一く上をあん
 氏と治し神り君
 下ふいふ。司馬温
 公は曰天をけ後ハ繼
 たり大なる莫然と
 命を大あふいふ
 分は名より大なるハ
 分りし人んと名
 分を解くふす
 分らま。神意
 ねれをす
 後孫某の撰
 者一人ハ
 出り式於々
 此の時の
 のみりまわ
 分らま。



款をけす父
 頼基杖とる
 てらと杖とる
 君ハ今
 名分をす
 禮をゆふ
 分はあま
 嗚呼此人
 け又あま
 分り



謙徳公の三男として
 所母八代明親との
 所むすめ謙徳公は
 一未拵以伊妻公の
 所むすめ

藤原義孝

月しるしを
 たりとす
 けり

ご拾遺た末巻さとんがのからうりへり
 とりせのらうのひらるれるしもあらずならば
いりやならばのうらひもならばのうらひもならば
からいへりとすならばのうらひもならばのうらひもならば

とうとんを
 おりよふ
 へ

藤原義孝の話

ひん謙徳公の北の方八代明親の所むすめ
さのかの義孝とて二人の所むすめ
せい士質なりりれとりりりりりりりりり
ち周がいれはるらるらるらるらるらる
い一条院の所むすめとて二人の所むすめ

休ひりりり
 たりとす
 たりとす
 たりとす
 たりとす



在香

江月照江波
 水波清有月影
 為佛性我法心
 地印世路亦空
 證道居士
 主覺

身處徑路曰
 練心於法
 多為之為精我心
 智運目之為道計
 我者此乃佛の道と
 信し月の夜法華に
 諷讀してせむち
 小法をん人
 候せといひとせむ
 といふを
 かの持進親



此の方外沛... 今世... 死... 行... 母... 義者... 七者... 中僧...
此の方外沛... 今世... 死... 行... 母... 義者... 七者... 中僧...
此の方外沛... 今世... 死... 行... 母... 義者... 七者... 中僧...

志... 母... 義者...
志... 母... 義者...
志... 母... 義者...

昔契蓬萊言裏月... 今遊極樂界中風...
昔契蓬萊言裏月... 今遊極樂界中風...
昔契蓬萊言裏月... 今遊極樂界中風...

左大臣師尹公の孫
 父の正時ハ侍從
 叔父の時時養ひて
 子ト一ノ条帝ノ位
 一ノ條右兵衛佐
 佐と歷位上上
 叙ヤ、左近衛の
 中ノ一也

藤原實方御代

かきふえや
 けいし
 けいし

は捨集巻一ノ下
 新ノ意ハカヤ
 伊吹山ハ下野ノ名所
 其山ト云ハ草

草ノ意ハ今ノ
 其ノ意ハ
 助字ト云ハ
 其ノ意ハ

藤原實方朝臣の語

實方御代叔父時時ノ養子ナリ
 或ノ春殿上ノ
 其ノ意ハ
 其ノ意ハ
 其ノ意ハ

齋信の大納言とまよ ぶきまこ

のりともりの成御時あり川ら飲ハあり方其の
 ましいともるをこれとて川を実方りて
 行成りしつづし其な殿上様なり成つし
 争ひゆせし事もいふまじき事やんよか
 成つて冠と笏と持て殿守目とて冠もも
 怒りつけば殿守目とて冠もももて
 守刀もかまぬきりて髪けりて
 さいやんたらまらぬほろの冠もあはれし
 多しゆね其子細とつけたまはるつな
 半部はんぶのくわくわより主上しよじやう始納しやうとて後のちにけり
 貴殿きでんにたまはれ
 比飛人の官の明なりて越つて飛人なるれ
 実方ハ中ねの友とめりけりて陸奥よつ
 されり一旦の不礼とてあせたまはる
 一階すあぐけりし時右並みぎならの御宣ごのたまひなり人此実方
 つくさなきならぬを実方なりて下候げこう下候
 ねの心より御宣ごのたまひのりて
 やすしつてあひしりて
 中飲のんハ君の御神を蒙りて都は
 くらひし事あるも御世
 こやなき方の御人なるか都は

貴殿きでんにたまはれ
 比飛人の官の明なりて越つて飛人なるれ
 実方ハ中ねの友とめりけりて陸奥よつ
 されり一旦の不礼とてあせたまはる
 一階すあぐけりし時右並みぎならの御宣ごのたまひなり人此実方
 つくさなきならぬを実方なりて下候げこう下候
 ねの心より御宣ごのたまひのりて
 やすしつてあひしりて
 中飲のんハ君の御神を蒙りて都は
 くらひし事あるも御世
 こやなき方の御人なるか都は

日と... 馬の下轄... 都の...
日と... 馬の下轄... 都の...
日と... 馬の下轄... 都の...

陸奥... 五月五日... 軒... 菅... 彼...
陸奥... 五月五日... 軒... 菅... 彼...
陸奥... 五月五日... 軒... 菅... 彼...

老翁... 彼... 東方... 陸奥... 越... 彼...
老翁... 彼... 東方... 陸奥... 越... 彼...
老翁... 彼... 東方... 陸奥... 越... 彼...

祖父八九條右大臣
補公父法住寺為光
公母八誼徳公のむす
め道信の官位ハ
左中納言四位正曆
五年廿二歳にて
卒

藤原道信朝臣

唯のりも
あはれ
あはれ

あはれあはれあはれ

ね拾遺集恋上二首のふり付了け日ゆひ
作りのけしきく二首中の一首は秋の意に夜
鳴れ又其日暮の日は又付くけり
うとみそけり別ははるるけり

ふりてあはれのせはれり
入る今一首ハ

かこの道やいほわらわら
あはれ

藤原道信朝臣の話

一條院の二階より六月大ぬれあり其妻せしむ相模守封
恒徳の謚ヤ其子道信の母也
の妻ハ一箇年して除服すり常礼がなり制しけり
服とぬるけり

かきりあはれあはれ
あはれあはれあはれ

通兼公道行朝臣秋卷

北の方

やめ

すつしゆのそめたお倍のえんぢうぬまの春うらまひりうかなし又甲

春は長徳のまさゆきの山野ふり実澄まじやう六部むくの所ところすめた

花山院はなやまのいんの女むすめ所ところふりうらまひりうかなし又甲

うらまひりうかなし又甲

すつしゆのそめたお倍のえんぢうぬまの春うらまひりうかなし又甲

すつしゆのそめたお倍のえんぢうぬまの春うらまひりうかなし又甲

百首一夕話卷之四終

